

# 巫女がつくる歴史伝承

—阿武隈山地の小手姫伝説—

川 島 秀 一

## はじめに

福島県の阿武隈山地の北西部に、中世には信夫郡の「小手保」、近世には伊達郡の「小手郷」と呼ばれていた地域がある。現在の川俣町・靈山村・飯野町・月舘町・福島市（一部）に当たる地域である。この地域は、信夫郡と伊達郡を合わせて、近代まで「信達地方」とも呼ばれていた。本稿では、この小手地方に伝わっている「小手姫伝説」を対象とする。

その結果、「小手姫」伝承は、文字を保有する者だけでなく、巫女などのシャーマンによつても変容し、成長してきたものであることが見出された。ここでは、特に、戦後になつて登場した二人の巫女と「小手姫」伝承との関わりを取り上げることで、「伝説」という口承のテキストに成る以前の生成の現場、あるいは、解体された「伝説」を統合していく再生成の現場について報告を試みたい。そして、文字や巫女の言葉によつて刺激を与えられ、規定されながらも、そのことによつて生き続けてい

る口承の世界も明らかにしていきたいと思う。

本稿では、これらの資料を、広い意味で「歴史伝承」と捉え、「伝説」という言葉の枠組みを一応ははずしておいて、「小手姫」

## 一、『日本神話伝説集』の「小手姫」伝説

表 「小手姫伝説」の変容過程

【前期】	
1788（天明8）	三浦甚十郎編著『小手風土記』（1）に「大和國高市郡川俣里より庄司峯能と云し人ひとりの娘小手姫」と記される。
1838（天保9）	『小手古事談』（2・写本）
1841（天保12）	志田正徳編著『信達一統志』巻之一（3↔1）、巻之六（4）小手莊布野川郷に「織女堂」の記事がある。
1848（弘化4）	『小手濫觴記』（5↔1 or 3）
江戸末～明治初	『小手姫蚕の由来』（飯坂村谷沢佐久間家所蔵・6）
1878（明治11）	『飯坂村社寺明細調書』（7）
1887（明治20）	「機織祠碑」（8）
1895（明治28）	機織神社の「屋根替講祓棟札」に「祭神小手比売命」と記される。
1896（明治29）	福田村残茂内の菅野善右エ門が山形県東田川郡長宛てに、出羽の蜂子皇子に関する照会、回答を得る。この後「小手姫之伝」（現在不明）正副を作成する。
1900（明治33）	『信達二郡村誌』巻之廿一の「布川村」（9）、巻之廿二の「飯坂村小社機織神社」（10↔7）、「川俣村後庵館」（11↔6）、「物産の盛衰起因」（12）。
1902（明治35）	『信達二郡村誌』付録・甲集之上巻の「機織神社由緒」（13）に「崇峻天皇卷二元年三月大伴糠手連女小手子為妃是」が記される 甲集之下巻の「女神明神社由緒」（14）にも「小手子姫ハ崇峻天皇ノ后妃」と記される。
1906（明治39）	吉田東伍『大日本地名辞書』第七巻奥羽の「機織神社」（15↔13）に、小手子姫説に対して「近時、或は説を為して曰く」とある。
1910（明治43）	「小手子姫神社社殿新營費寄附金募集趣意書」（16↔13・11） 女神山山腹に女神明神の社殿を創建。小手姫・伊佐奈美命・小笠媛命の三座を祀る。
1923（大正12）	このころ、川俣町において福島県主催の全国絹織物品評会を開催。 伊達郡役所編『伊達郡誌』第十七章第二節口碑伝説の「小手郷と小手姫」（17↔1）
1926（大正15）	山根正一『小手風土記人物誌』の「小手子姫の伝説」（18↔13）
1928（昭和3）	近藤喜一『信達民謡集』（郷土研究社）の「小手郷と小手姫」（19↔17）
1929（昭和4）	柳田國男『日本神話伝説集』（アルス）の「機織御前」（20↔13）
1931（昭和6）	『染織辞典』（日本織物新聞社）の「小手子姫」（21）

注記：文献には年代順に番号を付し、その書承関係が明らかな場合は「↔」で示した。

【後期】	<p>1951（昭和26） 川俣町秋山の愛宕神社境内に「小手姫神社」の供養碑を建立。</p> <p>1954（昭和29） 11月29日、月館町布川に「三山教会」の村上春恵巫女・島貫三起子・高橋清一氏が訪れる。</p> <p>1955（昭和30） 布川御前堂の屋根替えをして祭典。出羽三山祝（はふり）高橋建氏と「三山教会」から参加する。</p> <p>1967（昭和42） 6月27日、女神山頂にて初めての小手姫神社祭礼。羽黒山手向の宗教法人「三山大愛教会」の神林茂丸氏・福島市的小野寺虎正氏・東京の星とく子巫女が参加。小野寺氏が山頂で「靈光」や、女神山頂の磨崖碑「小手姫神社」の碑面に蚕の姿を撮影する。</p> <p>1974（昭和49） 11月30日、長谷部廉三『女神山記』（小手姫顕彰会・22↔14） 『福島県史』第二十四巻民俗2の「昔話と民俗」（23↔21↔13） 『月館町伝承民話集』（月館町教育委員会）の「小手姫の事蹟と女神山（史考）」（24↔22）</p> <p>1975（昭和50） 『川俣史談』創刊号・第2号で「小手姫伝説研究」の特集を組む</p> <p>1976（昭和51） 岩崎敏夫編著『磐城岩代の伝説』の「小手姫池」（25↔23↔21↔13）同「小手郷と小手姫」（26↔17↔1）</p> <p>1977（昭和52） 森徳治「四神の女神山上祭にあたりて」（私家版・27↔22）</p> <p>1980（昭和55） 月館町教育委員会『ふるさとの小径を行く』の「小手姫を祀る布川の御前堂」（28）に「数ある小手姫伝説の中心にこの御前堂があり」と記される。同「女神山」（29↔22↔14）</p> <p>1981（昭和56） 石川純一郎・竹内智恵子『日本の伝説 45福島の伝説』（角川書店 30↔1）</p> <p>1982（昭和57） 川俣町文化財保護審議会編『川俣町の文化財』の「大清水機織御前堂旧跡地」（31↔2）</p> <p>1985（昭和60） 『川俣町史』第一巻通史編第二章古代の「養蚕と絹織物業の展開」（32）</p> <p>1986（昭和61） 川俣町の機織神社に「小手姫様の由来」（33↔16）の碑を建立。</p> <p>1987（昭和62） 川俣町観光協会「大和国より小手姫来り蚕機初し事」（34↔5） 月館町教育委員会『月館町の民俗』第五章の「女神山」（35↔29）同「御前堂」（36↔28）</p> <p>1992（平成4） 八月十五日、川俣町の中央公園山上の小手姫ブロンズ像除幕式でパンフレット「大和国より小手姫来り蚕機初し事」（33と同）を同町で配布。</p> <p>1993（平成5） 川俣町中央公園小手姫像の説明碑文（37） 川俣町教育委員会『社会科資料・かわまた』（小学校三・四年使用の「小手姫さま」（38）</p> <p>1996（平成8） 大堀敏雄「文献からみた小手姫伝説の研究」（同『続・続川俣地方史の研究』・私家版・1993・39） 阿部利之『飯野物語』（創樹社・40）</p>
------	---

「小手姫」伝承の変容の過程に入る前に、おおよその「小手姫」伝承の紹介をしておきたい。簡潔に「伝説」として表現している例として、昭和四年（一九二九年）にアルスから出版された、柳田国男の『日本神話伝説集』の「機織御前」から引用してみる。これは、後の昭和七年（一九三二年）に『日本の伝説』として春陽堂から改版本が出るテキストである。

「福島地方の絹の神様、小手姫御前も元は一つであらうと思ひますが、こちらには親子の話があるのです。小手姫様は今の飯坂の温泉の近く、大清水の村に祀つてあるのが最も有名で、土地では機織り御前の宮といつてをります。いろ／＼のいひ伝へがあつて、少しも一致しませんが、今でもよく知られてゐるのは、羽黒山の神様蜂子の王子の御母君であつて、王子のあとを慕つてこの國へ御下りなされ、年七十になるまで各地をあるいて、蚕を養ひ絹を織ることを人民に教へ、後にこの大清水の池に身を投げて死なれたといふのであります。それはとにかく、社の前には左右の小池があつて、水至つて清く、今も村々の人は絹を織れば、その織り留めをこの御宮に献納するといふことあります。（信達二郡村誌）

この事例を先に引用したのには、一つの理由がある。表のよう、「小手姫」伝承を年代順に並べてみると、この柳田国男の『日本神話伝説集』や『日本の伝説』を境にして、約三十年間も「小手姫」についての文献資料は消えてしまっている。別表の「小手姫伝説」の変容過程において、「前期」と「後期」

に分けた大きな理由である。この間は第二次世界大戦と戦後の混乱期であったことも一因しているが、ともかく、この資料が、戦前の「小手姫」伝承の一つの到達点を示しているわけである。

さて、その「小手姫」伝説の内容であるが、柳田は事実関係の誤解を二点ほどしている。一つは「小手姫」を「おでひめ」と読み違え、この引用文の前文で触れた「栃木県那須郡黒羽町北滝字御手谷」の「那須のことや」の伝説と「元は一つであらう」とつなげようとしている点である。二つめは、「飯坂」を福島市近郊の飯坂温泉と捉えているが、事実は現川俣町の旧飯坂村のことである。

これらの誤読が意味していることは、柳田が『信達二郡村誌』という文献資料にのみ依拠したということ、「日本神話伝説集」がこの例のような全国の文献資料によって編み出されたことを再確認すべきことを示している。

「小手姫」伝説の要約部分で、柳田は、一度は「いろ／＼のいひ伝へがあつて、少しも一致しませんが」と断つてから、「今でもよく知られてゐるのは、羽黒山の神様蜂子の王子の御母君であつて、王子のあとを慕つてこの國へ御下りなされ、年七十になるまで各地をあるいて、蚕を養ひ絹を織ることを人民に教へ、後にこの大清水の池に身を投げて死なれたといふのであります」と述べている。柳田は、「ここで、水辺における母と子に対する信仰を導き出そうとしているが、ここに至つて、柳田がなぜ「おでひめ」を「こてひめ」と読もうとしたかも明らか

かにしている。つまり、『日本書紀』の「崇峻記」では、崇峻天皇の妃の名をこのように読ませてはいるのである。

しかし、柳田が依拠した、明治三十五年（一九〇二）の『信達二郡村誌』には、実は当時、新しく解釈され、作成された「小手姫伝説」が載つていたのである。

## 二、「小手姫」伝承の変容過程

表に見受けられるとおり、近世の風土記の類には、小手姫は「大和國高市郡川俣里より庄司峯能と云し人ひとりの娘小手姫」とだけ記され、蜂子皇子とのつながりについては記されていない。ところが、川俣の養蚕絹織産業が盛んになるにつれて、明治二十年に「機織祠碑」という、川俣の養蚕の由来を記した碑を建立し始めたころを境にして、川俣の皇学者・国学者・神官たちが『日本書紀』を見て、「小手子妃」の記事を発見し、羽黒山の開祖蜂子皇子との関連を付け、この考証に腐心するようになる。つまり、小手子妃と蜂子皇子との子別れの悲劇を作り出すわけである。

明治二十九年（一八九六）の十月には、福田村（現川俣町）の政治家の菅野善右衛門が、山形県東田川郡の郡長宛に、出羽三山の蜂子皇子に関する照会を行なったという回答文書を出したようだが、小手姫と羽黒山との関係が生じるのは、この時期から

と思われる。出羽三山にまつわる伝承がからんできたのは、小手地方が近世を通して、三山信仰の厚い土地柄であることも、一つの要因を成していると思われる。

また、明治三十九年（一九〇六）の、吉田東伍の『大日本地名辞書』第七巻にも、川俣の「機織神社」の項目があり、そこでは小手姫の崇峻天皇妃説を「近時、或は説を為して曰く」と記し、最近になって作り上げた説だとしている。

その「機織神社」が「神社」として改称されるのが、明治十一年（一八七八）のことと、それ以前は「機織御前堂」と呼ばれていた。「機織神社」は、明治十一年に氏子十一戸で出発した。ところが、明治四十三年には、「小手姫」ではなく『日本書紀』にある「小手子姫（妃）」の名を採用して「小手子姫神社」として社殿を新築し、そのときの発起人の町有力者が百二十名になるまで、約三十年間に氏子が十倍以上も拡大している。つまり、「小手姫伝説」も、近代天皇制国家の成立とともに、地元の郷土史家が中心となつて改変していく伝承である。

より具体的には、明治四十一年（一九〇八）に、当時の皇太子殿下（後の正天皇）が川俣に行啓している。その二年後に、川俣で福島県主催の「全国絹織物品評会」を開催し、そのときの各役員の徽章は、小手姫の肖像であつた。その肖像は、右手に練り糸を一捻り、左手に桑の枝を持つていて、姿だつたといふ。<sup>注付</sup>この年に「小手子姫神社」と改称されるわけである。近代の「小手姫伝説」が、川俣地方の絹織物業の発展と背中合わせに

なつて定着していったのは、ほん間違いないと思われる。

### 三、布川の小手姫伝説と巫女

「小手姫伝説」の伝承地は、主に福島県の川俣町と月館町に分布している。月館村は以前には、明治二十二年（一八八九）から「小手川村」と「小手村」という村名で成立しており、「小手川村」は昭和三年（一九二八）まで、「小手村」は昭和三十年（一九五五）まで、その名で隣り合っていた。<sup>注5</sup>この「小手川村」の旧布川村と、「小手村」内の旧村、糠田・上手渡・下手渡・小島各村が、「小手姫伝説」のセンターであり、川俣町とともに三つ巴になつて、小手姫の引き合いを演じてきた箇所である。特に、「小手村」には標高五十九・四メートルの「女神山」と呼ばれる山が川俣町と接して聳えていること、小手姫伝説が定着する上で、大きな要因になつていている。

さて、前述したように、昭和四年（一九二九）の柳田国男の『日本神話伝説集』以降、第二次世界大戦を経て、戦後は昭和四十二年（一九六七）の『女神山記』まで、小手姫に関する文献資料は見当たらない。昭和三十九年（一九六四）の東京オリンピックを境に、この地方の養蚕農家が減少し始めたころに、『女神山記』が上梓されるわけである。

しかし、この文献資料の空白期に、月館町の布川と女神山周辺で、それぞれ別の巫女が外部から到来して、「小手姫」の伝

承を再生成することになる。

まず、昭和二十九年（一九五四）十一月二十九日、布川に「三山教教会」という、出羽三山に関わる新興宗教の主宰者三名が訪れる。司祭の高橋清一と島貫三起子、そして管長の村山春恵巫女であった。

村山春恵巫女は明治三十八年（一九〇五）、宮城県川崎村の旧碁石村の生まれで、平成十一年（一九九九）に亡くなつている。若いころから信心深く、初めは日蓮宗の信者であったが、後に出羽三山で修行を経ている。戦争中は、仙台の二十人町に居住していて、出征兵士の家族たちが、村山巫女に、兵士の無事を占つてもらつたといふ。村山巫女が、団扇太鼓をたたきながら題目を唱えると、兵士の靈が憑いて、家族に向つて語るために、巫女の依頼者は、彼女のことを「兵隊ばあさん」と呼んでいた。<sup>注6</sup>村山春恵は、死靈や生靈を憑かせて、一人称で語ることができる巫女だつたわけである。彼女は後に、仙台の福来友吉を中心とする「東北心靈科学研究会」にも関わつた巫女としても著名になる。

昭和二十七年（一九五二）に、彼女を中心として「三山教教会」が宗教法人化するが、その機関紙「三山教」創刊号（昭和二七年一一月三日付）で、村山は「御挨拶に代えて」という題で、次のように記している。

「出羽三山の青木宮司様の御言葉にもござりますとおり、古來より出羽の三山は行の山、お淨めの山といたしまして全国

的に知られる靈山でありますことは、言をまたないのでござりますが、御開祖様の御事につきましては、お山の行事、又は御祭事にその御事跡を拝しますのみで、余り多く知られておりませぬようでございます。それが図らずも不肖靈台と致しまして、その神通力を得ましてよりここに十年、出羽三山の御開祖様こそ、とりも直さず造物主大神の應化におわしましたことを、その御神勅のまにまに、御開祖大神様のお跡をしたいまつりまして行するに及んで、初めて御感應(おしらせ)せいただいたのでござります。(中略)

大神様も、「神とはた佛とはこれ同じこと。」と仰せいだされました。大神様の靈台を通じての御言靈のお現れによつて、三山教は月山を父として羽黒山を母体といいたしまして、湯殿山の產湯を浴びて誕生を見るに至りました

これを読むと、彼女は出羽三山の御開祖様(蜂子皇子)の「靈台」として、神通力を得たようである。つまり、蜂子皇子の靈を憑かせて、その言葉を語ることができるわけで、このことを「御感應(おしらせ)」と呼び、語る言葉のことを「御言靈」(おことだま)と呼んでいる。

「三山教教会」が発足して二年後、村山巫女には、蜂子皇子だけではなく、その母親の小手姫も憑依し始め、「小手姫を祀つてはいる社の屋根が朽ちている」という内容のオコトダマが出ることになつた。そのため、出羽三山を通じて探索を始め、彼女を布川の御前堂へ導くことになる。昭和二十九年(一九五五)

四十一月二十九日に、布川の村人とともに、御前堂の前に立つた村山巫女は、この場所でも小手姫のオコトダマを発することなる。

当時の御前堂は、布川の養蚕農家の減少とともに、信仰をする人も少なくなり、屋根も崩れたままであつた。小手姫のオコトダマに従い、翌年の昭和三十年(一九五五)には屋根替えをしてから、四月二十九日には、布川の村人と「三山教教会」の信者とを交えて祭祀を行なつた。「三山教」からは、村山巫女管長を始めとして「信徒一同」が「小手姫神社」と記された幟二旗を奉納した。御前堂には、昭和九年(一九三四)に「小手姫神社」と記した屋根替え寄付掲示板が奉納されていたからである。この時点で、それまでの「御前堂」は、再び「小手姫」の名を得た。これが、現在まで毎年四月(現在は第一日曜日)に行なわれている、布川の「小手姫神社」祭典の始まりである。

布川の御前堂は、天保十二年(一八四一)の『信達一統志』卷之六(小手荘布野川<sup>(注7)</sup>郷)に「織姫堂」として「小手姫の靈を祭れる者なるべし」という記述がある。「織姫」と「小手姫」との混同が感じられるが、この時代の「小手姫」は「小手郷」ゆえの小手姫であり、崇峻天皇の「小手子妃」との同一化は、はかられていなかつた。近代に入つても「小手姫」の御前堂と語らされることもあつたようだが、昭和三十年(一九五五)前後の布川では、単に「御前様」と呼ばれており、小手姫の伝説は、むしろ川俣の方へ一步譲つていて感があつた。<sup>(注8)</sup>

ところが、この村山巫女の出来事以降は、この御前堂を再び、小手姫に関わる御堂として喧伝し始めた。口頭伝承の場合を考えると、「織姫御前堂」が容易に「小手姫御前堂」に変わり得る可能性があつたことも一因している。

その後にも、村山巫女は小手姫のオコトダマを語ることがあり、伝説も次第に整備されてくる。たとえば、小手姫が、布川へどのようなルートで入ってきたのかを、目に見えるように具体的に語つたために、それまでは単なる「駒形石」としてあつたところも、小手姫が乗つてきた馬が倒れた場所として語られるようになる。つまり、布川は小手姫が信達地方に初めて足を踏み入れた地として、小手姫の終焉の地とされる川俣町に対抗していくわけである。

村山巫女の出来事があつてから、御前堂の祭祀に積極的に関わってきた布川の熊野神社では、その後、境内に「小手姫神社」を建て、その祭典も前述のように開催し続いているが、「布川の小手姫伝説」というパンフレットも作成している。それには、「一、御前堂」で、崇峻天皇や蜂子皇子との関わりが以前からあつたような記述をした後、「二」以降は、次のように伝説地を列挙している。

### 〔二〕 布晒石

御堂より三十米程上流には小手姫が布を織つて川水に晒して石に乾かしたところから布晒石と伝えられる石が川岸の辺に今もある。

### 三、簾塚

堂の近くに姫が使われた簾を埋めたところといわれる塚である。

### 四、竹ノ内

姫が繭から糸を取り出すのに使用する「あや竹」をとつたところからこの地名が起きたとつたえられる。

### 五、わく塚

姫が使用したわくが流れついて納められた処からわく塚と称されるようになった。斎藤治良家の裏山に塚が在る。

### 六、布川

昔瀧沢村と称されていたが、小手姫が布を織つて晒した由来から布川の地名となつた、

### 七、千本沢、千部沢

姫に心をよせた男が千日千夜通いつめたしに棒を立てたところから千本沢と云いまた、千部のお經を埋めたところから千部沢とも云う、加藤商店の前の窪がそうである」これらの伝説のうちで、竹ノ内の「あや竹」は、俗称カンマカス竹と呼ばれ、繭を煮てから、かき回すときに用いる竹の棒に用いるが、最近までの養蚕農家はこの「あや竹」を採つていたといわれる。おそらく、「布晒石」も「簾塚」も「わく塚」も、養蚕業の盛んなときに使用された場所であり、その道具を納めた場所であつたと思われる。つまり、村の養蚕業にとつて大事な場所に、伝説が付会したわけであった。

さらに、このパンフレットでは、すべて小手姫の伝説になつてゐるが、以前は、「布晒石」や「わく塚」・「布川」・「千本沢、千部沢」などは、小手姫の娘とされている「錦代姫」の伝説であつた。たとえば、『信達二郡村誌』附録に渡辺憲之助氏が寄稿した「機織神社由緒」には、次のように記している。

「錦代皇女墓ハ伊達郡小手村大字布川字御前堂ニアリ同字ニ

祠ヲ立テ往古ヨリ錦代皇女ヲ祭リ錦代宮トイウ信達名所旧跡

帳ニ布川錦木ノ宮トアリ現時里人機織御前堂ト称ス此村ニ皇

女ニ闕スル地名數多アリ村名ヲ布川ト称スルハ皇女布ヲ晒シ

タル川アリ最モ清潔ニシテ洗濯ニ適ス是ヲ以テ名トスト又布曝石アリ其支用セラレタルワクヲ埋メタル所ワク塚トイフ或ハ竹ノ内或ハ御前堂ノ西ハ千部沢ト唱フル處アリ相伝フ僧

アリ皇女ノ為ニ吊る祭ヲ起シチ部經ヲ捧読セス所ナリト」

この記録をみると、『布川』・「布曝石」・「ワク塚」・「千部沢」は、「錦代皇女」の伝説であつたことがわかる。特に「千本沢」は、いわゆる全国的にも分布する「錦木」の伝説であり、以前には明らかに「錦代姫」の伝説と記されてゐた。今でも、布川の「下がり神山」には、錦代姫が葬られた場所と伝えられている「錦木塚」があり、そこには明治二十七年（一八九四）の旧三月十五日に建立された「蚕神」の碑が建立されている。

つまり、『信達二郡村誌』の「機織神社由緒」において、川俣は「小手姫」、布川は「錦代姫」と腑分けしたものを、再び

布川で小手姫を奪回し始めたわけである。昭和五十五年（一九八〇）に月館町教育委員会で発行された『ふるさとの小径を行く』では、「小手姫を祀る布川の御前堂」という小見出しが、「数ある小手姫伝説の中心にこの御前堂があり」とさえ記されるようになつたのである。

#### 四、女神山の小手姫伝説と巫女

以上のような、巫女による小手姫伝説の再生成は、旧小手川村の布川だけですまなかつた。それから十年後に、今度は旧小手村の女神山周辺でも、小手姫をめぐる非日常的な出来事が起つた。

始めに、昭和四十二年（一九六七）発行の、長谷部廉三著の『女神山記』から特筆された部分を引用しておく。この書は、戦後になつて初めて活字化された、小手姫に関する、まとまつた文献としてだけでなく、それ以前の約三十五年間の文献の空白期間を破つた点でも注意される。ここで引用している部分は、著者がなぜ、女神山を中心として小手姫伝説をまとめることができたか、その裏面をはからずも載せてある。

「斯うした昭和四十一年六月三日突如山形県東田川郡羽黒町手向三山大愛教管長神林茂丸先生より招請され福島市万世小野寺寅正氏の御案内で共に羽黒町に至り始めて神林先生に御逢いした。そして諸資料に由る女神山こそ小手姫の産業指導

の最初にして最後の場所であり、亡くなられた地であり頂上に十九ヶ村の決議に依て祭祀された事を申上げた。其の縁に依て六月十七日神林先生始め福島市内信者の人達五人と東京の巫女、星とく子先生も同行され突然女神登山の上、小手姫神社祭典執行の手筈を調べて御出でになりすぐさま私も御案内して、女神山頂に登り親しくお祭りを終えて、此の女神山こそ小手姫の御住居と御亡くなりになつた終えんの地であり神と祭られた山に相違無し、との星先生の御話しがあつたが、神林先生は此の大石こそ四柱神の御神体として御祭りしたものに相違ない、との御話しがあつた。私は是で判つた様な気がする<sup>(注1)</sup>

ここに記されている星とく子巫女は、女神山山頂で「此の女神山こそ小手姫の御住居と御亡くなりになつた終えんの地であり神と祭られた山に相違無し」と語つている。つまり、小手姫が亡くなつた場所であつたがゆえに巫女が感心したという構図である。

星とく子巫女は、大正六年(一九一七)に岩手県の大船渡市に生まれている。彼女は東京の嫁ぎ先が経営する自転車製造工場が廃業したころから一種の巫病にかかり、靈友会、創価学会と様々な新興宗教団体を転々とする。そして、突然と「靈動」を感じて出羽三山へ向つた。このあたりの事情については、星巫女が現在も入会しているA宗教団体の機關紙に載つた、星巫女からのインタビュー記事から引用しておく。

「昭和三八年十一月十九日に靈動がおこり出し、二十一日に「出羽へ詣れ、出羽の為に働け!」と言うので、出羽の宮下坊へ行つたところ、宮下夫婦は生憎と上京中であり、行き違いとなつて了つて、指導も受けらずに帰つて来たそうである。

そして、昭和四十年九月七日に、三女の和江さんと二人で出羽へ行き、母娘は勝手先達なしに御詣りをした。そして、下りの三の坂の処に生えている大杉のてっぺんに居た天狗さんに挨拶を申し上げたところ、ブラジルの八百万教団から來た佐藤先生と言う方と御一緒していた神林管長さんを引き合わせて呉れたそうである。ちなみに此處は八坂神社を祀つてあるイワサカであつたのだ。

そして、宿坊での色々な話からして序でに月山へ行く話がまとまり、出掛けたところお池(鏡ヶ池)が在り、創価学会を脱退する時に投げ込まれた池(引用者注:夢で見た風景)にソックリであつたそうである。爾来、星とく子さんの出羽詣り修行は今日に迄及んでいる(金井南龍「神一柱」)以上のような経緯で、星とく子巫女は、昭和四十年に羽黒の手向にある「三山大愛教会」の管長である神林茂丸と出会いであるが、翌年に彼女は神林管長からの依頼で共に女神山に登ることになる。この管長に女神山と小手姫の関わりを調べて欲しいと頼んだのが、月館町の郷土史家の長谷部廉三であった。長谷部廉三は、明治三十四年(一九〇一)に生まれ、昭和五十

一年（一九七六）に亡くなっている。長谷部は郷土の研究者にあ

りがちな、中央史に結び付けるに思い入れの強い人物で、十代の頃、川俣の染色学校からの帰途、女神山に光り物を目撃したこと機縁に、女神山と小手姫との関わりを一生かけて追求することになる。<sup>注11</sup>星とく子巫女の話では、長谷部が星に初めて会つたときのころは、小手姫について確信を得られずに苦しんでいることを、泣きながら語っていた<sup>注12</sup>。つまり、星巫女にとつての長谷部は、この場合は一種のクライアントに等しく、彼を救済するために女神山に登り、小手姫の事跡を幻視しようとしたようである。

彼の確信がもう少し公になる機会は翌年に起きた。長谷部が『女神山記』に記すことになった出来事である。昭和四十一年（一九六六年六月三日、「三山大愛教会」の神林管長と星巫女、長谷部らが、女神山山頂で初めての「小手姫神社」の祭礼を行なつた。女神山山頂の「小手姫神社」とは、川俣町の秋山に向いた磨崖碑のことである。秋山からの信者が多かつた。

星巫女の話では、この祭礼のときに、彼女が長谷部家で横になつて休んでいると、夢の中で、音楽とともに白い龍が現れて、その口から、繭を出したそうである。彼女が判断するに、それは「お蚕様の弁財天」に変じた小手姫であり、「嬉しくて嬉しくて出てきた」と御札を述べ、その後で「繭を供えて欲しい」と語つたそうである。目を覚ました彼女は、そのことを回りの者に告げ、山頂にある磨崖碑の「小手姫神社」に層繭を貼り付

けたそうである。

そのときの磨崖碑を撮影したのが、福島市で三山の信仰をしていた小野寺虎正で、現像してみると、磨崖碑に向つて左側に蚕の姿が写っていた。また、小野寺は、山頂に立てられた幟旗の写真も撮影したのだが、そこには幟旗に向かう剣の形をした光が写っていた。これを神林管長は「小手姫に会いにきた蜂子皇子」と解釈する。これらの写真は、後にパネルに作つて三山大愛教会で所蔵することになるが、教会を訪れた信者のために、ときには絵解きによつて神林管長が用いる<sup>注13</sup>。つまり、写真が物語性を得たわけである。

この出来事から半年も経ぬうちに、長谷部廉三の『女神山記』は上梓された。

その後、昭和五十二年（一九七七）には四神、つまり崇峻天皇・小手姫・蜂子皇子・錦代姫を女神山山頂にて祀り、五十七年（一九八二）の祭礼には崇峻天皇を祀つて大阪の堀越神社の宮司も参加した。

このようにして、女神山の小手姫伝説は定着していくわけであるが、『信達二郡村誌』の「女神明神社由緒」で「姫此地ニ於テ崩御シ給ヒケリ 墳墓ハ該山ノ頂上將軍石の傍ニアリ」と記されたことが、信憑性を与えられて復活し、語られ始めるわけである。「女神明神社」も女神山山頂にある神社で、月館町の上手渡側と糠田側の方へ向いて二つの祠が山頂にある。山頂には、この他に、前述した川俣町秋山側の「小手姫神社」の磨

崖碑があり、女神山をめぐる多くの信者たちは、その後、羽黒の三山大愛教会の主催する祭礼に協力し、集まるようになつた。

昭和五十年代から昭和の終わる六十年代にかけては、「女神山」に関する記述は、小手姫の「遺体は女神山に葬つたといいます」とか「山桑の茂るのを見て、里人に養蚕や機織りの技を教え、この地で亡くなつた」とさえ表現されるようになつたのである。

### おわりに

以上のように、戦後になつて小手姫伝説を復活させた二人の巫女による、伝説の再生成の過程を述べてきた。布川の小手姫伝説を復活させた村山春恵巫女が、小手姫が憑いてオコトダマを発することに対し、女神山の小手姫伝説を復活させた星とく子巫女は神の姿に成った小手姫を幻視した。その憑依の表現方法に微妙な違いはあるが、両者共に、最終的に出羽三山の信仰をベースにして、自身の巫病を克服しているという共通性がある。特に村山巫女の場合は、若いときに子供を亡くしているそうであるから、蜂子皇子と別れた小手姫に同一化も可能であつたと思われる。

そして、三山の方でも、彼女らのような巫女を用い込むかたちで、遠方の信者を獲得し、霞を拡張してきた事実も見受けら

れる。二〇〇一年の五月十日付「福島民報」には、「小手姫さま安らかに」という見出しと、「山伏、祭文唱え供養」・「川俣・月館・飯野の有志 女神山で祭礼」という脇見出しで、当年の女神山山頂での祭礼の様子を報道している。「山伏」とは「出羽三山の一つ羽黒山の山伏である神林千祥師」とも報じている。神林千祥とは茂丸の子である。もはや、小手姫と蜂子皇子との関わりは疑われることなく、伝説としてテキスト化され、変容されながらも現在において、ますます強力に流布されようとしている。

近世の『小手風土記』<sup>注14</sup>に「異国の人は心にあわず、夫を持たずに入水」と書かれたように、小手姫は「苦しむ神」であったがゆえに、巫病に苦しみ、かつ三山の信仰に至つた巫女たちにとって同一化が可能であつた存在であつた。夫を殺され、流離した我が子を探しあぐねた一人の女性であつたために、巫女たちは、自身の苦労や巫病を重ね合わせて、小手姫と感応できたわけであつた。

ところが、現在の川俣町の「町づくり」などの文脈で説かれる小手姫は、たとえば平成七年の小手姫ブロンズ像除幕式のパンフレットでは、「川俣の人心を愛し、この地にて生涯の夫と出会い」と、近世の地誌とはまったく逆に、川俣で幸せに暮らしたよう書かれるようになった。

以上のように巫女などのシャーマンが伝説を発生させたり、再生成させたりする一方では、郷土史家を典型とする文字を持

つ伝承者たちも、伝説を委容させていたことが理解される。  
「伝説」や「歴史伝承」と呼ばれる口承文芸を、より明確に捉えていくには、巫女の言葉と郷土史家の文字とを同時に捉えていく方法を、つくりあげていかなければならないものと思われる。

〔注〕

- (1) 表を作るにあたって、大堀敏雄「文献からみた小手姫伝説」(同『続・続川俣地方の研究』・私家版・一九九三)が参考になつた。
- (2) 柳田國男「日本神話伝説集」(『柳田國男全集』第四卷・筑摩書房・一九九八)
- (3) 『日本神話伝説集』の解題については、『柳田國男全集』第四卷(注2と同じ・石井正己執筆)を参照のこと。
- (4) 長谷部廉三『女神山記』(小手姫顕彰会・一九六七)
- (5) 『角川日本地名大辞典7福島県』(角川書店・一九八一)
- (6) 二〇〇〇年一月三〇日、岩手県藤沢町の高橋一郎氏(大正一二年生まれ・三山教司祭高橋清一の子)から聞書。
- (7) 志田正徳編著『信達一統志』卷之六(一八四一)
- (8) 一九九九年一月二八日、福島県月館町布川の浦住盛夫氏(大正一五年生まれ)より聞書。
- (9) 渡辺態之助「機織神社由緒」(『信達二郡村誌』附録甲集之上巻・一九〇一)

(10) 注4と同じ。

(11) 一九九九年三月九日、福島県月館町入山の長谷部主計氏(大正一五年生まれ・長谷部廉三の子)より聞書。

(12) 一九九九年五月二二日、東京都荒川区の星とく子巫女(大正六年生まれ)より聞書。

(13) 一九九九年五月三日、山形県羽黒町手向の神林茂丸管長(明治四二年生まれ)より聞書。

(14) 『ふるさとの小径を行く』(月館町教育委員会・一九八〇)

(15) 『月館町の民俗』(月館町教育委員会・一九八七)

(16) 一〇〇〇年一月二二日、宮城県松島町の村山たき子嫗(大正六年生まれ・村山春恵巫女の子)より聞書。

(17) 三浦甚十郎編著『小手風土記』(一七八八)

(18) 「大和國より小手姫来り蚕機初し事」(川俣町観光協会・一九八六)

(付記本稿は福島県立博物館によるテーマ研究「福島県における養蚕習俗の研究」の調査過程において見出された資料をもとに構成した。)

(かわしま・しゅういち／気仙沼市図書館)